

# 活動報告書

報告者氏名： 平松伸一

所属： 大分県立別府支援学校

記録日： 2013年2月1日

## 【対象児（群）の情報】

- ・学 年 中学部2年 男子
- ・障害名 アスペルガー症候群
- ・障害と困難の内容

昨年度、普通校で不登校となり今年度4月に本校へ転入。本をよく読み、雑学的知識は豊富。完璧主義で失敗を恐れ、文字を書こうとしない。興味の範囲が狭く、教科の学習ができにくい。やや視覚優位。生活には周囲の多くの手助けが必要。

## 【活動目的】

### ・当初のねらい

本人と、現在の社会や人との間にある「壁」を取り除く方法として、iPadは有効に使えるそうであると予測した。iPadを触りたがらないので、触れるきっかけにしたい。本人がメモをとらないため、連絡等を写真で記録することにより、先の見通しを持ち安心して生活できるようになることを目指した。また、保護者へ写真等を使ってわかりやすく学校生活の様子を伝えたいと考えた。

## 【活動内容と対象児（群）の変化】

### ・対象児（群）の事前の状況

先の見通しが立たないと、ほとんど活動できない状況が続いていた。また、文字をうまく書けないことを恐れて、なかなか書こうとはしなかった。書いたとしてもひらがな程度だった。

### ・活動の具体的内容

アプリ「EverNote」をiPadと本人・母のスマートフォンにインストールし、同期できるようにした。

### ・対象児（群）の事後の変化

写真で日課表がいつでも見られるので、本人にとって予定がわかりやすく、気持ちが安定してきた。

また、常時、校外でもインターネットに接続できるので、校外での活動（調べ学習など）が広がった。その際、出会った人とコミュニケーションで、説明するためにブラウザ「Google Chrome」を使って、本人から進んで活用できるようになった。

さらに、以前はひらがなしか書かなかったが、iPadを使って漢字を自分で調べ、形を確認したことで安心できたのか、初めて漢字を書いた。

## 【報告者の気づきとエビデンス】

### ・主観的気づき

当初は、本人の極度の興味の狭さ、経験のないことへの警戒心の強さから、iPadに触れることに消極的であった。しかし、ゲーム・映像アプリの使用などで少しずつ慣れさせていくようにしてきたため、本人が使うごとに有用性を理解し、利用するようになってきて、生活のいろいろな場面で活用してきている。

### ・その他エピソード

母親からは「日課表をいつでも見ることができるので本人が安心している」と聞いた。母親は、本人の障害についてよく理解し勉強もしており、支援学校でiPadを使うことにも関心が強い。本人には、家庭でスマートフォンを持たせており、父は情報機器についての知識が豊富なので、本事業との関連に期待している。

## 【環境の工夫】

外部からの情報が遮断された空間ではリラックスできるため、生活の中に物理的構造化が必要。教室では段ボールを利用して個別の空間を設けている。また、日課表など予定の視覚的構造化も図っている。



くつろぎの空間  
(カーテンも使用)



学習する空間



決められた場所で  
学習している様子

# 活動報告書

報告者氏名： 豊田 悟

所属： 大分県立別府支援学校

記録日： 2013年2月1日

## 【対象児（群）の情報】

- ・学 年 高等部3年 男子
- ・障害名 脳性まひによる両上肢機能障害・移動機能障害
- ・障害と困難の内容

肢体不自由・知的障害。普段は車いすで移動するが、短時間であればロフトランド杖を使った歩行も可能である。慣れない環境（人や場所）を嫌がり、その場を離れようとする事が多く、環境に適応するまでの時間がかかり必要である。また、一人で長時間集中して活動することが困難で、活動に対する意欲が低い場合には、全く取り組もうとしない。

## 【活動目的】

### ・当初のねらい

「慣れない環境に置かれても、自発的に iPad を使い、一人でも活動できるようになれば、充実した時間、余暇を過ごせるようになるのではないか」また「卒業後の進路（施設利用）において、iPad を通じてコミュニケーションを図ることができれば、担当者（介助者）が替わっても、支援を素直に受け入れられるようになるのではないか」と考えた。

## 【活動内容と対象児（群）の変化】

### ・対象児（群）の事前の状況

本人が納得して十分な気持ちの切り替えができないと、次の活動に移ることはできず、何もしなくなる場面が見受けられた。加えて、急に環境や人が変わることに対応できずに、同様になることもあった。卒業後に複数の施設を利用することを考えると、人や環境が変わっても早く慣れるようになることが必要であると思われた。

また、卒業後の施設では、一人で活動する時間が現在よりも増えることが予想される。そのため、いろいろな活動に興味を持ち、意欲を持って自発的に取り組むことで、集中力を持続できるようになり、充実した時間を過ごせると考えられた。

### ・活動の具体的内容

iPad を使い始めた頃は、大好きな歌手のアプリ「HOTEI」や楽器アプリ「Kanon Drum」「太鼓の達人」など、興味を持つ内容のアプリを使っていた。iPad にも慣れ、自分で操作できるようになると、それまで使っていた特定のアプリだけでなく、その他のアプリを自発的に使うようになってきた。「おむすびころりん」などの読み上げ絵本シリーズ、文字学習アプリ「hiragana（ひらがな）」や「katakana（カタカナ）」、「やってみよう」などを使うことが多かった。また、学園祭で発表する劇のセリフを覚えるために、iPad の録画再生機能を活用していた。

### ・対象児（群）の事後の変化

iPad の利用によって活動の幅が広がり、授業担当者以外からの支援も素直に受け入れるようになってきた。また、初めて現場実習に行った施設でも、知らない人たちの中でも嫌がらずに長時間活動できた。自宅でも一人で活動できるようになったことで、家族を制約することが少なくなった。

## 【報告者の気づきとエビデンス】

### ・主観的気づき

今回の検証では、iPad を学校だけでなく校外（家庭や施設）にも持ち出して利用したことで、iPad での活動そのものに早く慣れることができた。また、iPad に興味を持つようになれば、「トイレに行ってから iPad をしよう」「歩いて iPad を取りに行こう」などと、iPad に関連付けて他の活動を働きかけることも有効であると思われる。



担任が声をかけても全く動こうとしないことも…



施設に行っても、一人での活動もできるようになった

これまで家での余暇は、テレビやビデオの視聴が多かったが、iPad によって活動が広がった



# 活動報告書

報告者氏名： 豊田 悟 所属： 大分県立別府支援学校 記録日： 2013年2月1日

## 【対象児（群）の情報】

- ・学 年 高等部3年 男子
- ・障害名 脳性まひによる四肢体幹機能障害
- ・障害と困難の内容

肢体不自由。ロフトランド杖を使った自立歩行。左右の脚に機能差があるため、歩行時のリズムが一定にならず、転送しそうになることがある。

## 【活動目的】

- ・当初のねらい

両脚の機能の差が大きいことが原因と思われる歩行時の不安定さをなくすことで、転倒を防止する。意識的に左右の脚を同じリズムで踏み出す習慣を身につけるために、音を出してリズムを刻むメトロノームの機能を活用できないかと考えた。

## 【活動内容と対象児（群）の変化】

- ・対象児（群）の事前の状況

右足に比べて左足の機能が低く、右足を前に踏み出す際に引きずることも多い。両脚に機能の差があるために、身体のバランスが安定しないことがある。

また、自分のペースで歩く時は、膝を十分に上げずに足を踏み出すことで、つま先が内側を向いてしまい、転倒しそうになることがあった。

- ・活動の具体的内容

まずは、手すりを持った状態で立位を保持し、iPadのメトロノームアプリ「Metronome+」のリズムに合わせて膝を上げる訓練から始めた。次に、ストレッチングチェアで両脚の筋肉をよく伸ばしてから、iPadを利用した歩行訓練に取り組んだ。歩行訓練では、iPadを持った教師が車いすに乗り、それを押して歩くようにした。

メトロノームの音に合わせて歩くことで、ゆっくりとしたリズムでは十分に体重を片足に乗せ、速い時にはテンポ良く安定したリズムで踏み出すようになってきた。

- ・対象児（群）の事後の変化

メトロノームの音に合わせて歩くと、以前よりも左右の脚をバランスよく踏み出すことができていた。普段の歩行時でのバランスはまだ十分ではないものの、日常生活で転倒しそうになる場面は減少した。

また、iPadを使った場合、音に刺激されて訓練に対する意欲も高まる傾向が見られ、歩行距離が延びることが多かった。

## 【報告者の気づきとエビデンス】

- ・主観的気づき

iPadを使い始めたうちは1分間に60拍程度のリズムで歩いていたが、慣れるにつれて徐々に速いリズムにも合わせて歩けるようになった。以前のリズムは、速く歩く時でも90拍程度だったが、iPadを活用した訓練をするようになってからは、徐々に速く歩けるようになった。時には、自らテンポを上げて120拍近いリズムで歩くこともあった。



iPadの画面を見ながら一人で脚上げの訓練をしている様子



教師が持つiPadの音に合わせて歩いている様子

# 活動報告書

報告者氏名： 野上晃代

所属： 大分県立別府支援学校

記録日： 2013年2月1日

## 【対象児（群）の情報】

- ・学 年 高等部1年 女子
- ・障害名 肢体不自由（左半身まひ）・知的障害
- ・障害と困難の内容

穏やかで優しい性格であるが、恥ずかしがり屋で消極的である。母親に甘えている部分が強く、自分の困りを把握し、具体的な支援を求めることが難しい。左半身まひで、活動のほとんどは右手のみで行っている。PCやiPadには興味があり、積極的に取り組む姿が見受けられる。

## 【活動目的】

### ・当初のねらい

中学校の活動では「できなければ、しなくてもよい」という環境があった。しかし、高等部卒業後の就労を視野に入れた時、「自分でできることがどこまで、できない部分をどのように支援してもらうか」ということを相手に伝えることが課題であると思われる。そのためには、「集中して作業できるようになること」と「一人ではできないことを判断し、担当者に支援を求めることができるようになること」が必要であると考えた。そこで、作業学習においてiPadを活用して、これらを身につけるとともに、iPadが「自分にとって有益な支援ツールであること」に気づかせることを目的とした。

## 【活動内容と対象児（群）の変化】

### ・対象児（群）の事前の状況

当初、作業学習の工程は写真カードを利用して示していた。左半身まひのため、インデックスをつけてはいたが右手だけでカードをめくることは思いの外、作業学習の中でストレスになっていると感じられた。

### ・活動の具体的内容

作業学習で「Keynote」アプリを使い、プレゼンテーションで作業工程を示した。指1本あればタップして次の工程へ進むことができ、写真カードよりも大きな画面で確認できるため、少しずつではあるが、作業に集中することができるようになったと思われる。

作業工程の中で回数を数える時は、ホワイトボードにマグネットを使って回数を貼っていた。しかし、iPadのアニメーション機能を使えば、画面をタップするだけで表示されるため操作も簡単で、道具の準備も軽減・短縮することができた。

### ・対象児（群）の事後の変化

作業工程を覚えてくると、「keynote」アプリを自分で操作し、必要な工程から表示していく方法にも気づいた。iPadに変えてからは、ストレスが減り、作業への集中力やスピード、支援の求め方の変化に現れるようになった。また、iPadを自分で操作する喜びから、積極的な姿も見受けられるようになり、教師へ支援を求める場面では、具体的に伝えることができるようになってきた。

## 【報告者の気づきとエビデンス】

### ・主観的気づき

iPadの基本操作、支援アプリの操作方法を身につけるにはあまり時間を要さなかった。これは、生徒本人がiPadへの興味が強かったためだと思われる。

生徒の学習活動や卒業後を想定した生活に適したiPadの使い方やアプリを見つけることができれば、教材準備等の負担は大きく軽減される。教育効果が期待できるアプリについては、多くの教員との情報交換によって容易に見つけることができると思われる。ただし、生徒の実態は、学習内容は学習場所によって変わることがあるので、本当にそのときに必要なものであるかという判断をしていくことが必要だと思われる。



「Keynote」で工程を確認しながら作業している様子

生徒が気をつけなければならない内容を分かりやすく表示

